

第
38
回

大阪の医療と福祉を考える 公開討論会

大阪府医師会は 10 月 1 日、「第 38 回大阪の医療と福祉を考える公開討論会」を開催し、約 300 人の方にご参加いただきました。今回は「在宅医療ってなあに？——2025年、老後の医療を考える」をテーマに、各パネリストが見解を示しながら、在宅医療の現状や課題を議論しました。



まず、茂松茂人会長があいさつ。本日の討論を通じて在宅医療の理解を深めていただく一方で、在宅医療を受けずに過ごせるよう、「できる限り自分で動くことが大切」と述べ、今後も健康保持増進に向けた活動を継続すると明言しました。

当日は、上田崇順・毎日放送アナウンサーの司会で開会。前川たかし理事、原聡氏（原クリニック院長）、中原淳太氏（大阪府保健医療企画課長）、松井愛・毎日放送アナウンサーがパネリストとして発言されました。その後、本会の中尾正俊副会長がコメンテーターとして討論を総括しました。

◆自宅が持つ補完機能——前川理事

自宅で療養することで回復力が高まることも多く、その有効性を主張。在宅医療を推進するには、医師同士・多職種間の連携や、患者の意思を尊重して家族が共有することが大切と述べました。

◆家族の介護力に課題——原医師

具体的な症例を提示しながら、在宅医療の範囲を示されました。更に、「かかりつけ医」が、事情を勘案して在宅医療を実践することが有効との説明がありました。

◆大阪の実情勘案し施策検討——中原氏

10年後は、「在宅医療の需要が増加する」との予測がなされ、それを想定した地域包括ケアシステムの構築に取り組んでいるとの現状や今後の展望が示されました。

◆次世代に「よりよい大阪」を——松井氏

自身の体験を交え、在宅医療・介護を「今から考えておくことが大切」とコメントされました。また、次世代が「生まれてよかった」と思える大阪になるよう、一人ひとりが意識し、考えることが大事とも述べられました。

◆在宅医療、覚悟もって——中尾副会長

中尾正俊副会長はコメンテーターとしてパネリストの意見を総括。介護をする家族の負担にも触れ、「覚悟」が必要と強調しました。その上で、「患者・家族を支える環境の整備が重要になる」と述べました。